

# カテゴリー判断と単純判断をめぐって

## [ラウンドテーブル・ディスカッション趣意書]

第 98 回ドイツ文法理論研究会

2017 年 10 月 1 日 (日)

於：広島大学

ドイツ文法理論研究会企画

Franz Brentano, Anton Marty らによって、19 世紀後半から 20 世紀の前半に言語哲学の分野で提案された 2 つの種類の判断 (カテゴリー判断 (categorical judgement), 単純判断 (thetic judgement)) は, Kuroda (1972) によって現代言語学の記述概念として再導入された。Kuroda はその際, 上記の 2 つの種類の判断は日本語において典型的にハとガの対立として現れていると考えたが, それは, それまでのヨーロッパ言語の概念を日本語にあてはめるやり方の逆の道を行きながら, 自身のバックグラウンドである生成文法の目指す普遍的な枠組みを持った統語構造の一般化を提示する試みを行ったと言えるだろう。

一方でカテゴリー判断, 単純判断の二分法は, Sasse (1987) が指摘しているように言語記述概念として広く認められるにはいたっていない。それにはいくつかの問題点があるが, それらの主なものは以下のようにまとめられる。

1. カテゴリー判断と単純判断について, 研究者によってその概念規定が少しずつ異なり, 必ずしも統一された概念とは言えない。
2. Kuroda は, これら二つの判断は, 典型的に日本語のハとガの使い分けに現れるとしたが, この方法論はどこまで legitim なものなのか? これは, かつてのヨーロッパ言語の文法で「未開の言語」を記述するやり方を踏襲しているにすぎないのではないか?
3. この「カテゴリー判断 - 単純判断」という概念ペアは, 他の類似した言語記述の諸概念 (「総合文 (synthetic sentence) - 分析文 (analytic sentence)」(Carnap 1934, Leiss<sup>2</sup>2012), 「個体レベル述語 (individual-level predicate) - ステージレベル述語 (stage-level predicate)」(Carlson 1977, Kratzer 1995) など) との相違点はなにか? 一般的な文構造記述のモデルとしての「カテゴリー判断 - 単純判断」は, 他の類似の Apparat よりも有効でありうるのか。

以上の概念規定の問題をクリアすることにより, この「カテゴリー判断 - 単純判断」という概念ペアは, 多くの興味深い言語現象を解明する手掛かりになっていく。「カテゴリー判断 - 単純判断」に関わる言語現象として, 例えば以下のようなものがあるだろう。

- a. 「判断」, Prädikation, Assertion
- b. 文構造 (V2, 「ハ・ガ」) と「判断」

- c. Satzmodus と判断の種類
- d. 心態詞の使用と判断の種類
- e. 形容詞の種類と判断形式
- f. 目的語相関詞 es と単純判断性 (theticity)
- g. void subject (es) と判断形式
- h. 情報構造と判断形式
- ...

今回のラウンドテーブルでは、後半部 (a~h) など挙げた諸問題を取りあげながら、前半部 (1~3) で取り上げた概念規定の問題を扱いたい。

#### 参考文献

- Brentano, Franz (1874): *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Leipzig: Duncker und Humboldt.
- Carlson, Gregory N. (1977): *Reference to Kinds in English*. Ph.D. thesis. University of Massachusetts. Amherst [published 1980, New York: Garland].
- Carnap, Rudolf (1934): *Logische Syntax der Sprache*. Wien: Julius Springer.
- Kratzer, Angelika (1995): Stage-Level and Individual-Level Predicates. In: Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.), *The Generic Book*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 125–175.
- Kuroda, S.-Y. (1972): The categorical and the thetic judgment – evidence from Japanese syntax. In: *Foundations of Language* 9, 153–185.  
[erhältlich unter: <http://www.jstor.org/stable/25000656> ].
- Leiss, Elisabeth (<sup>2</sup>2012): *Sprachphilosophie*. Berlin and New York: de Gruyter.
- Marty, Anton (1918): Spezielles über den Ausdruck der Urteile und die diesbezüglichen inneren Sprachformen. In: Josef Eisenmeyer, Alfred Kastil und Oskar Kraus (eds.), *Anton Marty: Gesammelte Schriften*, 2. Bd., 1. Abt., Halle a.S.: Niemeyer, 223–301.  
[erhältlich unter: <http://www.archive.org/details/p1gesammelteschr02martuoft>].
- Sasse, Hans-Jürgen (1987): The thetic/categorical distinction revisited. In: *Linguistics* 25: 511–580.